

遠隔医療は「映像を含む患者情報の伝送に基づいて遠隔地から診断、指示などの医療行為及び医療に関連した行為を行うこと」と定義されます。北海道に次ぐ面積の岩手県で1998年11月、北沿岸地域で日本初の遠隔妊婦健診の実証実験をしました。

良好な結果から、経済産業省の事業である平成18〜20年度遠隔医療情報システムプロジェクト一周年電子カルテネットワーク一週連携プロジェクトの指定を受け、釜石地域での妊婦在宅管理、産婦人科医療施設のない遠野市一県立大船渡病院での遠隔妊婦健診が行われています。

遠隔妊婦健診の最大のメリットは、遠距離の通院リスクを軽減し、待ち時間も短縮できるなど、妊婦サービスの向上に寄与できることでしょう。妊婦さんが長時間かけて峠を越えて病院に通う大きな負担を解消するなど、妊婦サービスができます。

地域の助産師・保健師による

質の高い遠隔医療と命を救う道路



とのコラボレーションが必要で、「質の高い遠隔医療と命を救う道」がこれからのキーワード、と考えています。

第23回日本遠隔医療学会学術大会

ケアを受けることができ、地域の連携ができます。市町村が関わることで、地域における行政と医療の連携が図られ、地域の周産期医療の情報ネットワークや管理システムを確立できます。

しかし、妊婦さんの長距離通院のリスクが軽減でき、身近な自治体のサービスが受けられ、病院で診断するのと同様に遠隔で質の高い診断ができて、現在の技術では、異常発生時や救急治療を要する妊婦さんやお腹の赤ちゃんの命を遠隔医療だけで救うことはできません。

高次医療機関への移動手段

地域で小さな命を守る取り組みから

を10月5〜6日、盛岡市において県民情報交流センターで開催します。特別シンポジウムでは大石久和元国交省技監、厚労省医事課の加藤琢真氏、総務省情報流通振興課の増原知宏氏、横浜国大都市イノベーション・イノベーション研究の細田暁氏の4先生をお招きし「地方を支える遠隔医療と命の道」について考えたいと思います。是非ご参加いただき一緒に考えてみませんか。

過疎化地域では医療相談窓口や診療所機能を持つ道の駅も増えていると聞きます。道の駅が命を救う道の一翼を担うことを期待します。